

小西一雄教授記念号に寄せて

小西一雄先生は長年にわたり、経済学部の教育・研究の向上・発展に尽力されました。その小西先生の功績を讃えて、ここに記念号を発刊できることは、経済学部にとって大変名誉なことであります。

小西一雄先生は、本学経済学部助手を経て1982年4月に経済学部専任講師に就任され、以来31年間という長きにわたって国際金融論と学部ゼミを中心に経済学部の教育に尽くされました。先生は国際金融論のほかにも、外書購読、基礎演習、経済学などの科目を担当され、また全学共通カリキュラムの「市場と社会」、「世界経済と日本」、「経済学の基礎」を担当されるなど、学部を越えて広く全学の教育にも尽くされました。とりわけ学部ゼミにおいて数々の優秀な職業人を輩出するとともに、少なからぬ大学院進学者、研究者を育ててきました。さらに大学院においては、国際金融論およびマルクス経済学を研究する院生の指導教授として多くの研究者を世に送りだしました。

また小西先生は、研究者としても多くの成果を上げられました。先生の研究分野は大きく分けて、アメリカのドル特権依存型成長の構造と限界の分析を含む国際金融・通貨問題の研究、金融ビッグバン批判を含む日本経済の研究、そしてそれらの理論的基盤をなすマルクスの『資本論』およびその草稿の研究に集約することができます。

国際金融・通貨問題の研究については、最初の論文において金ドル交換とその停止の意義とについて当時の学界の水準を大きく引き上げる研究を提示され、さらにマルクス経済学に依拠した国際通貨・金融問題研究において、統計資料の本格的な分析の先駆けとなる論文を発表され、学界に多大な影響を与えました。その後、金ドル交換停止以降の国際通貨関係においてドル危機はどのような内容で生じるのか、またドル特権に依存したアメリカ経済の成長の構造と限界は何かなどの研究を進められましたが、その研究内容の多くは学界の多数説あるいは通説に対する根本的な批判を含むものでした。これらの研究内容は近年では2008年のリーマンショック前後の世界的な金融危機やその後の経済・金融危機の分析にも直結する射程をもつものでした。

小西先生の国際通貨・金融問題の分析の基礎はマルクスの貨幣・信用論の研究にあります。この分野でも先生は新たな見地を打ち出されました。例えば、従来、銀行信用論を軸に理解されてきた『資本論』第3部第5篇を「貨幣資本の蓄積と現実資本の蓄積」の分析を軸に理解す

るべきであるとの研究は、貨幣・信用論の研究に新たな知見をもたらしました。これは国際的なマネーゲームの隆盛、企業収益における金融収益の占める比重の増大などの現実を分析するという要請と、一方でマルクスの草稿研究 (MEGA , 4.2の研究) からの知見とを統一しようとする研究から生まれた視角です。

さらに日本経済の研究にも、産業循環と恐慌の理論を踏まえた鋭い分析の目を向けました。特に先生は、草稿研究を踏まえたマルクスの恐慌論を武器として、日本におけるバブル経済の形成と崩壊、「日本の失われた20年」の構造と歴史的意義を中心とする日本経済分析と、これに関連する多くの時論を発表されました。

いずれの研究分野においてもその背後には常に「資本主義的市場経済のオルタナティブ」の探究という先生の問題意識が横たわっていることは言うまでもありません。

一方、小西一雄先生は学界活動にも多大な貢献をされました。経済理論学会幹事、信用理論研究会理事を務められ、また日本学術会議経済理論研究連絡委員会委員などを務められ、日本の経済学界の発展のために尽力されました。

また、小西一雄先生は大学・学部運営の場でも長年にわたって数々の要職を務められました。学部においては経済学科長、大学院主任を経て経済学部長・経済学研究科委員長・立教学院評議員を、大学においては二期にわたる大橋英五総長のもとで総長補佐、総長室長、立教学院常務理事を歴任され、学部教学条件の設定をはじめとして、立教大学と経済学部の発展に多大な貢献をされました。

こうした教育・研究における姿勢は、我々後に続く者にとって大きな勇気と激励を頂いた気持ちです。小西一雄先生がこれからもますますご活躍されることを祈念して、記念号の発刊辞に代えさせていただきます。

2014年3月

経済学部長 郭 洋 春